



TITLE:

<報告>前川暢夫教授の新任に当って

AUTHOR(S):

辻, 周介

CITATION:

辻, 周介. <報告>前川暢夫教授の新任に当って. 京都大学結核胸部疾患研究所紀要 1971, 4(1): 46-47

ISSUE DATE:

1971-01-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/52348>

RIGHT:

前川暢夫教授の新任に当って

辻 周 介

内科第一部門の教授候補者として、前川暢夫博士が、本年8月29日の教授会で選出された。内規（申し合せ）に従って、この選考資料を紀要の最新号に掲載公表するためこの原稿を執筆する次第であるが、単に資料を羅列するよりも、選考までの経緯を簡単に記して、研究所外の紀要の読者の理解をも深めたい。

教授会のみが選考にタッチしていた従来の方式によらないで、教官の多数の意志が反映され、しかも選考の妥当性を失なわない様な新しい教授選考方法を産み出すべく「人事に関する勉強会」（以下勉強会と略す）が発足したのは、昨年の9月であった。内藤前教授の停年退職を控えて、勉強会の各員は非常に熱心に討論を重ねられた。併し、教授と呼ばれる研究者の元来ある可き姿を求めての議論には、本来完全な意見の一致などあり得なかったのであろう。何となれば、本来ある可き姿と考えるものの内容に関しては、各員それぞれの自由選択的な着想が許される筈で、しかもそれらの着想は各員の内外的な状況に応じてまちまちであり得るし、尚其上に必ずしも固定的でなく容易に変化し得るからである。丁度「理想の奥さんとは何ぞや」という議論に似たものではなかったか。奥さんの良し悪しは、各人の好みに応じて、いかようにも判断出来るし、又この好みそのものが当人にとっても確固不動のものではない。「恋は思案の外」というのは、この辺の機微をとらえたものであろう。

兎に角9ヶ月にも及ぶ勉強の末に、恋は思案の外ではあるが、結婚相手は親だけで決めるのではなく若い当人の意志が反映されねばならないという極めて常識的な基本理念に基づいて、

具体的な教授の選考方法の討議に移ることとなった。その結果、新しい教授選考内規が成立したのが本年7月3日であった。

この内規では、教授選考委員は、有給教官全員の互選で選ばれることになっており、特に階層別の選出方法はとられていない。従って、委員全員が助手である場合もあり得る。結婚相手なれば、親や兄弟に全然相談せずに決めても責任は当人だけが引かふればよいが、教授の選考は、そうは行くまい。現実には、教授2名、助教授1名、助手2名という割合になった。

選考委員会の委員長には辻教授が選ばれた。具体的な選考方針として、「結核内科の研究を主とし、尚他部門との協調の下で、非結核性の胸部疾患にも研究の手を上げ得る人物」を選ぶこととし、その旨は教官全員に通知公表された。この方針に対し、どこからも異議がなかったもので、その線に沿って委員各自が夫々意中の人を選び資料を交換調査した結果を委員会で突き合わせるという方式で、前後3回の委員会が持たれた。かくて、最終的には3名の候補者の資料が教授会に提出されることとなった。

8月27日の教授会には、教授会よりの要請により、選考各委員が出席して意見を述べた。又出席教授5名のうち2名の教授の希望により一両日資料調査のための日をおき、8月29日に投票を行う予定とした。

投票結果は、前川暢夫博士が一回の投票で過半数となり、最終教授候補者に決定された。今回の教授選考の具体的方針（結核内科の研究者）にのっとって我国の現状を眺めてみると、今更ながら研究者の層の薄いことが痛感された。広く学外に人材を求めることに困難を感じたとは

選考委員の大方の感想であった。このことはかえって、結核研究所から出発した当研究所のような研究機関に於てこそ、この方面の研究者の養成に力を致す必要があることを示すものであろう。

前川博士の研究業績は、学位論文としての「結核の病巣反応に関する研究」以后は、結核化学療法の実験的及臨床的研究に終始一貫していると言ってよい。この点研究者にとって必要な研究の持続性に欠くところはない。一面マンネリ化は避け難いことで、今回教授になられたのを機として、研究分野の開拓拡充に努められることを期待したい。

博士が性温順頭脳明せきであることは夙に人の知るところであるが、一面断じて行うの気概に乏しいうらみがあるかに見えた。併し、昨年来の紛争以来教官会議の議長として、しばしば難事を処するの態度を見ると、必ずしも決断力

に欠くるわけではなく、外柔内剛のさがのうちに、事を公平に処断するの意志がうかがわれた。このことは、将来研究所として遭遇するかも知れない運営上研究上の難局に処するに当り、博士がよって頼りとするに足ることを示すものであろう。

博士が病気で休んだということは聞いたことがない。又斗酒をも辞せずとの噂にも拘らず、宿酔に倒れた話も知らない。一見きゃしゃな体に筋金が入っていると言う可きであろう。この筋金の入った体と意志の力をもって、新しい内科第一部門の再生に努力されるであろうことを期待しつつ、新教授の紹介をおわる。

附記 前川博士の業績目録は、「結核の病巣反応に関する研究」6篇の他、「実験的前眼結核症を対象とする結核化学療法の研究」其他55篇に及んでいる。